

観音、地蔵の大乗菩薩の精神と現代社会

張総

菅野博史 訳

観音と地蔵は中国からアジアに至るまでの仏教のなかで最も影響のある大菩薩であり、大乗仏教の精神を見事に体現している。菩薩の自利・利他の精神は、古代社会において、軽視することのできない重要な作用を発揮した。悲、智、行、願の精神は、四大菩薩、すなわち観音・文殊・普賢・地蔵の諸尊のなかで体現され、観音の悲愍、慈愛、苦難の救済、慈悲と智慧をどちらも働かせる精神、地蔵菩薩の大願を立てて苦行すること、孝養の道、死者を救済する行為は、すべて古代社会が個人の運命や究極的関心に対して無視するこ

とができず欠くことのできない要素である。国際学術界のたゆまない努力によって、観音と地蔵の信仰が古代社会のなかで広範に伝播していた事実は日に日に明らかとなつていく。現在知られているところでは、今日まで伝承されてきた漢地の漢語系仏教とチベット・モンゴル地区のチベット仏教に早くから観音信仰の經典造像、靈妙な効験の跡があるだけでなく、たとえば日存在しなくとも、たとえば歴史上タングート民族が建てた西夏国や烏蛮、白蛮族が建てた南詔国、大理国、さらにはイスラーム教やゾロアスター教などを信仰す

る回鶻（ウイグル）、于闐（コータン）、ソグドなどの民族にはすべて観音と地蔵の信仰の痕跡と文物がある。農業形態の封建社会のなかで、観音、地蔵の信仰はかつて存在した強大な信仰であったが、工業化し、商品経済の発達した社会のなかで、どのように認識し対処すべきか、これは我々が今日直面する重要な課題の一つである。

一 観音、地蔵菩薩の信仰の流布

菩薩は梵語のボーディ・サットヴァに由来し、菩提薩埵と音訳し、菩薩と略す。また「覺有情」「発大願宏誓」ともいい、大願心を生じ、実践の意を与えた。菩薩行は、六度万行を修習することであり、身を捨てて虎に食わせ、肉を割いて鳩の身代わりとなり、人々に代わって地獄に入つて苦を受け、衆生を捨てて自分だけ成仏することを願わない。菩薩の特質は、三界を超出し、涅槃に入り、成仏覚悟することができなければならないことである。菩薩は業力に左右されず、願に乘じ

て来り、苦を救い難を救い、大慈悲を持ち、自由自在な崇高な境界を備えている。仏教の核心思想の一つは業力である。業は梵語のカルマ（羯磨と音訳する）であり、有情の行為、すなわち為すこと、行為、意志などの身心の活動を意味し、あるいは意志によって引き起こされる身心の活動を意味する。業と因果は互いに関係し、いかなる業をなしても、すべて相応する後の果を引き起こす。有情の作る善悪の業は、必ず相応する苦楽、異熟の果報を引き起こす。各種の苦楽の報応は、三世と六道の輪廻のなかで実現するはずである。有情衆生の種々の差別は、自身の行為の結果を得たものであり、すべて業力のうえに形成される。一切衆生のもつすべての果報は、必然的に業力によって招かれ感得されたものである。つまり、有情衆生が三世、六道の輪廻のなかでぐるぐると流転するのは、すべて業力によって決定されたものである。もししっかりと八正道を守り、成仏の道を歩めば、輪廻を超出し、完全な涅槃に達し、成仏覚悟することができるといえる。仏の前生の物語は我々に、釈迦仏が幾世にもわたって修行をしたこ

とがあり、ついに覚悟証道することができたことを語っている。諸大菩薩は六度を行じ、衆生を救い、非常に善良で、功德が無量であり、本来、輪廻を出て、生死を越え、成仏得道することができ、大菩薩はかえって広く深い偉大な誓いの願力によって、濁世に來り、久しく娑婆に住し、衆生に近づいて、有情を救済する。観音は生を救い、地藏は死を司る。釈迦仏の滅度以後、弥勒仏の下生以前、地藏菩薩は人々の死後の世界である冥府において判決を下し、地獄のなかの苦難を救う。観音菩薩は人々の生活のなかで苦難を聞き知り、救済して止まない。したがって、観音と地藏は人々に最も身近な大菩薩である。仏教が中国に伝来し、さらにアジアの多くの国に伝わってから、観音と地藏はどちらも最も崇拜された大菩薩である。

(一) 観音信仰の諸民族、地域における現われ

観音信仰は古代社会のなかで、一時期大流行したことがあるが、一部の情況はすでに複雑でよくわからなくなっている。考古、文物の事業が今日獲得した業績

にともない、さらに言語、民族などの学問分野の進展があり、古代社会のなかの于闐、回鶻、ソグド、タングート、契丹、モンゴル、チベットなどの民族の観音信仰と流伝の情況は日に日に明らかとなり、特に新疆地区、西夏王朝のタングート民族などの方面の観音經典、圖像材料の刊行頒布と研究が日に日に増え、これらの貴重で稀少な材料は、これらの民族、地域の観音信仰が自己の特色を持っており、漢地の観音信仰のなかには備えていない内容を持っていたことを説明している。したがって、これらの学術活動に対する整理を重視し強化することは、観音信仰の広範な流行を理解するのに大いに意義がある。

新疆地区は、民族、宗教の交流変化が最も複雑な地である。現在、すでに于闐語と回鶻語系にはすべて観音經典があり、さらに石窟、寺院の遺跡や、出土した絹画などの芸術作品があり、観音信仰と圖像のかつての流布分布を説明していることが知られている。

「于闐について」

タリム盆地の南辺に位置する古于闐国（今の和山地

区）は、漢代は西域都護府の管轄に属し、唐の後期には吐蕃に占領され、五代の時には後晋に封じられて「大宝于闐国」となり、宋代の景德三年（一〇〇六）にカラ・ハーン王朝に滅ぼされた。タリム盆地の北端の龜茲地区に相對して、于闐は大乗仏教が発達した地であるが、菩薩の跡はけつて多くない。敦煌藏經洞の文書のなかには、いくつかの『般若心經』、個別の観音經、一、二の観音像がある。『般若波羅蜜多心經』の于闐語本は、フランスのペリオ3510号貝葉本のなかに所藏されており、西暦九六五年前後に、梵本から訳された。⁽³⁾『般若心經疏』の于闐語本もまたある種の梵本から訳された。⁽⁴⁾于闐の字体の梵文には「帝釈般若心經」（ペリオ2855など三件）⁽⁵⁾があり、さらに于闐韻文体の書写の三つの『法華經綱要』があり、そのなかのペリオ2782の巻尾の供養人の題記には劉再昇という名があり、彼は五代の天福七年（九四二）に中原の後晋に來て入貢した于闐の使節であり、この写本は彼が途中敦煌を経由したときに留めたものである。⁽⁶⁾貴重な于闐文の観音經にはさらにペリオ5532号『不空羼索呪心經』⁽⁷⁾や、フラ

ンス所藏のペリオ4524号の于闐の發願文の写本の前面に六臂観音の白描像がある。敦煌の漢文遺書のなかに四種があり、瑞像の図画の脇書があり、イギリス所藏のスタイン5555号などの漢文写本は于闐を救助する觀世音、弥勒、虚空藏、宝壇花の四大菩薩を列出し、于闐文、およびチベット文の写本、たとえばペリオ2853とP.2860はすべて于闐を護衛する八大菩薩を挙げ、その中にも観音がいる。要するに于闐の観音の經と像は比較的少ないけれども、やはり貴重な遺物がある。⁽⁸⁾

「回鶻について」

回鶻民族は、今の維吾爾族（ウイグル）の前身であり、その文字、文化は周囲の民族に対してとても大きな影響を生み出したことがある。回鶻文は、中央アジアのソグド文に由來し、西暦八四〇年から、十四世紀に回鶻がゴビ砂漠の北から西の新疆と河西地区に移るまで、ずっと回鶻文字を使い、モンゴル文字、満州文字はすべて回鶻の文字に由來する。『法華經』は回鶻の人々のなかで多く流伝し、現存するいくつかの残卷は、『法華經』のなかで観音について説く「普門品」が最も流行

したことを証明することができ。現在知られているのは、トルファンから出土し、それぞれロシアに所蔵されている卷子本、日本に所蔵されている梵籙本、ドイツに所蔵されている二件（交河の故城から出土）と出土地不明の一件の残巻は、すべて「普門品」の内容である。また、窺基の作った『妙法蓮華経玄賛』にも回鶻文の翻訳があり、主にスウェーデン所蔵の残巻、日本の羽田亨所蔵の写真、フランス所蔵本、ドイツ所蔵本がある。回鶻文の『観無量寿経』も発見されたが、回鶻文の観音経で最も特色のあるものは、一種の韻文体の『観音経相応譬喻譚』であり、古代の回鶻の仏教界のために『観音経』を講説し、また歌うことのできる文書である。その具体的な形態は、頭韻を踏んだ四行詩であり、多くの箇所には漢字が入りまじっている。イギリスの国家図書館はOr.8212号⁽⁷⁾を所蔵しており、十五頁三百四十六行を保存しており、元代の敦煌写本に属すはずであり、ただし文句のなかの「……為首高昌国官員和人民一起」から、もと高昌地区⁽¹⁰⁾で書写されたものとわかる。北京大学図書館に保存する附T2と

附T3の二つもまたこの経であるが、その年代はイギリス所蔵本よりさらに早い⁽¹¹⁾。

回鶻人が建造した仏教石窟には、敦煌、トルファン、龜茲地区のそれぞれの石窟があり、寺院には著名な北庭の大師があり、今、遺址がある。トルファンのベゼクリク石窟の壁画の内容には、法華経変、大悲観音、千手観音、不空羂索観音、浄土図画などがある。トルファンの北庭の大師の遺址の壁画には、西方浄土変、観無量寿経変、馬頭観音像などがあり、これらの経変・画は多く回鶻文字の経文に基づいて描いたものである。高昌の故城E址B寺から出土した絹画は、十一から十二世紀の高昌回鶻の作品に属すはずであり、千手観音が日月、宮殿、象鈎、法螺などの法器を手に持ち、千手観音の傍らに脇侍として馬頭観音、白衣観音があり、さらに大自在天、雪山女神、忿怒金剛などがあるのを描いており、最も特徴的なことは、回鶻の服装を着た供養人であり、さらに画面には随意的円頂の寺院建築を配置していることである。画面の全体はやはり唐代の格調に合致し、細部にはかなり回鶻の特色

があり、これは高昌回鶻の宗教のなかの密教の観音が重要な地位を持つていることを物語っている。

「ソグドについて」

中央アジアのアムダリヤ、シルダリヤ河地区のソグド族は商売が上手で、両漢の後、中国に来て商売をする人が多く、多くの移民が集まり中国に留まって生活し、彼らが信奉するゾロアスター教の信仰も中国で流し、同時に仏教思想と芸術もソグドの人々の生活に浸透した。昭武の九姓である康、安、曹、史、石、米、何などの姓氏の人々のなかには、多くの芸術家があり、北齊の曹仲達、唐代の康薩陀はいずれも著名で影響のあった画家である。ソグド語は、印欧語系のイラン族中古東部方言の一つに属し、敦煌藏経洞のなかの数種のソグド文の仏教経典、特に観音経の存在から、観音信仰がソグドの商人の生活のなかで地位を保っていたことがわかる。ソグド語の経は主に漢文仏典から訳されたことが現在知られている。たとえば『不空羂索神呪心経訳本』、『観世音菩薩秘密藏如意輪神呪心経訳本』、『観自在菩薩如意輪念誦儀軌訳本』、『聖観自在一百八名

経賛』などである。⁽¹³⁾ フランス所蔵の『不空羂索神呪心経訳本』は唐の菩提流支訳『不空羂索神呪心経』と最も接近しているが、また梵本を参照し補充して訳は完成した。⁽¹⁴⁾ そして、『秘密藏如意輪陀羅尼神呪心経』は唐の実叉難陀の漢訳の同名の経本から訳された。⁽¹⁵⁾ 『如意輪念誦儀軌』は、唐代の不空の漢訳本の同名経に由来し、また仏部三昧耶印図を描いた。⁽¹⁶⁾ 『観自在菩薩一百八名賛』は、ソグド語の編集本であり、紙背に『仏名并陀羅尼』という漢文の名を題し、その部分の文字は梵文のソグドの音訳であり、その回向発願文は、編訳の目的が敦煌に住む康姓一族のために功德を求めて得ることであることを明らかにしている。⁽¹⁷⁾ 梵文『大悲呪 Or.8212号 (116)』はブラーフミー文字で書写され、そのなかには六十行のソグド文字の対応する音訳が書き込まれている。これらの観音経の訳本は唐代の密教の観音のなかの不空羂索、如意輪、千手観音がソグド民族のなかでかなりの影響があったことを物語っている。

(二)「親集耳伝観音供養賛嘆」などの韻文体の観音偈賛

近年、刊行頒布した西夏の経書、文献、図絵など、特にロシア所蔵の黒水城出土の文物は、西夏地区の観音信仰が十分に流行し、西夏の文物のなかの観音の經典と版画がとりわけ注意すべきであることを説明した。莫高、榆林などの石窟の作品も、西夏時代の『水月観音』の図像が十分に隆盛していたことを物語っている。

黒水城から出た西夏の皇建元年、二年書写の『親集耳伝観音供養贊嘆』は特別な存在であるが、まだ十分には研究されていない。ロシアのコズロフは一九〇七年と一九二四年の二度、今の内蒙古のエジナ旗の黒水城の遺址に来て、多くの文物を発掘したが、そのなかにこの経本があつたにちがいない。以後、その巻は敦煌文献のなかに混入して『俄藏敦煌文献』⑤のなかの俄Q311として刊行され、府憲展先生によって西夏の文献であることが鑑定識別された。

この漢文写本の最後の四行は書写者と校訂者の附記である。

皇建元年十二月十五日 門資宗密沙門 本明

依師利門標授中集 畢

皇建二年六月二十五日重依觀行對勘定 畢
永為真本

その時代は西暦一二二一年一月一日から一二二一年七月二十六日までであり、金代の衛紹王の大安三年、南宋の寧宗の嘉定四年に相当する。

この経本は、多くの種類の偈贊を集めたものであり、ある種の懺悔供儀のために使用する賛詞か、あるいは曼荼羅壇を修する時の専用文であるにちがいない。この偈集のなかには五十三個の小さな標題を列挙しており、多くは偈贊の名である。たとえば、増長定偈、召請智仏偈、不空牟尼供養偈、奉十種供養偈、□□誦呪偈、振鈴偈、礼贊上師偈、勾召亡魂偈、施財安位偈、奉曼荼羅偈などである。その密教の色彩はとても濃く、曼荼羅は多く出現し、さらに反復して念誦する呪語がある。多くの所で馬頭観音を説き、さらに観音六趣、六度などがある。そのうえチベット仏教と関係が密接であり、多くの所で上師について言及し、一カ所で「大手印」について言及し、一般の密教ではないことがわかり、あるいは訳の原本がチベット語の文献から来

たものかもしれない。さまざまな形跡から見ると、この経の偈集と『大乘莊嚴宝王経』との関係は普通ではない。たとえば『莊嚴宝王経』巻一のなかで阿鼻地獄が瑞相を現じて祇陀園林を莊嚴し、仏は除蓋障菩薩のために、これは観音菩薩が地獄を化度しようとして現じたものであると説いた。そして、『親集贊嘆』のなかの『贊呪功德偈』に、

菩薩は昔、地獄の中に在りて、祇陀の仏会にて神通を現じ、除蓋は見て疑い、因りて請問し、世尊は親ら六字の功を説く。

とある。これは経のなかに述べるものと完全に合致している。かつ『大乘莊嚴宝王経』はもっぱら六字の大明を説く呪典であり、その巻四の無量寿仏は観世音にこの大明呪を説くことを願う。観世音は、まだ曼荼羅を見ない者は、この大明を聞いて説くことができないと説く。その曼荼羅壇のなかには無量寿仏を描き、その右に大摩尼宝菩薩を描いているが、その左に六字の大明を描いているのは、とりもなおさず四臂の観自在菩薩である。チベット地区にはきわめて多くの『大乘

莊嚴宝王経』の貝葉本があり、伝説によれば、この経はとても早くチベットに伝入した。つまり西暦四、五世紀の時、チベット王ラトトリニャンツェンが空中からこの経を得て、後にソツエンガンボがトンミサンポータをネパールに派遣して本経の梵本を得させ、チベット語に訳して、後にチベットに持っていった。

また研究によれば、『印度文献史』（仏教文献）第七章のなかに、もっぱら観音菩薩について述べる一部の大乗経があることを説いており、その具名を『観世音功德龍詳記』といい、内容は『大乘莊嚴宝王経』と対応させることができる。⁽¹⁹⁾この経の兩種の経本のなかで、散文体を早い成立とし、偈頌体を遅い成立とする。その散文体の第二章に、六字の明呪を贊嘆する密教の呪願、

此の六字の大明呪は、是れ観世音菩薩の微妙なる本心なり。若し是の微妙なる本心を知ること有らば、即ち解脱を知る。

がある。これは六字の明呪に対する経の定義、つまり観音菩薩の微妙なる本心であるという定義を説明して

いる。『大乘莊嚴宝王經』にもまたこの意義があり、特にこの西夏の偈集『贊呪功德偈』に、

六字の明王神呪尊は、即ち是れ観音の妙本心なり。とある。これは上述の定義と完全に合致している。この偈集のなかにはさらに観音菩薩を礼賛する偈がある。

大聖慈悲願力最に帰命す。類に随いて身を現するを、名づけて観自在と為す。猶お如意珠のごとく能く清心有るに随う。故に我れは虔敬に蓮花足に頂礼す。

と。

集のなかの偈賛の種類はとても多く、毎段の偈賛の標題の下にはすべて小注があり、どのように拝礼儀式を進めるかなどについて注釈し、そのなかの一部は「亡き弟子」「亡き六道の衆生」などのために福を祈るもので、また死者のために福を求め罪を消すことがわかり、確かに漢地の観音信仰と異なるところがある。

面白いことは、回鶻文の『観音經相應譬喻譚』も韻文体であり、三つの部分がすべて韻文で始まっている。敦煌遺書のなかの『観音偈』、『観音礼』や宋代の筆記

録に記録されたもの、金元の時代の『観音偈』などは、すべて韻文体で観音偈賛を撰述したものである。敦煌写本の数種の『観音偈』、『観音礼』の文はみな同じで、すべて韻文体で「普門品」の内容を撰述したものである。研究によれば、観音の礼懺のなかで使用したものにちがいない。⁽²⁰⁾ 宋代の洪邁『夷堅志』には一則の『観音偈』を収録しており、内容は心智の面を説くことを重視している。「大智は心に発し、心に於いて尋める所無し。一切義を成就し、古も無く亦た今も無し」と。

字句もまた汀州の『白衣定光行化偈』と同じであり、その効用はかえって足の病を治すことであり、物語のなかには、その偈が子供や農夫が長い間患っていた足の病をうまく治したことを説いているが、とても奇怪である。金元の時代の『観音偈』、『邱山偈』、『菩提偈』はグループを構成しており、その形式は十分に複雑で、多くの歌うことのできる節、たとえば臨江仙、自東吟、平吟、側吟などの節があり、⁽²¹⁾ 中間にはさらに話すことのできる「白話」が加えてあり、形式は多様で、唐宋以前の整然とした偈頌体とは異なり、かえっていろいろ

ろな調子を用いて結合した元代の散曲と似ており、観音の偈賛には民族、時代の異なりに応じて、きわめて多くの変化があることがわかる。

(三) 諸時代、国家の地蔵信仰

地蔵菩薩の信仰は、中国、朝鮮、韓国、日本のすべてにおいて大変流行した。その形成発展にも大いに特色がある。地蔵の典籍の面には、近年、『地蔵懺儀』、『地蔵菩薩十齋日』、西夏文の『地蔵菩薩本願經』の発見と検討があり、石窟造像の面にも多くの成果がある。唐五代の時の『贊礼地蔵菩薩懺悔發願法』は、北京圖書館の敦煌写本、北885(重885)号によって世に存在し、その重点は礼賛と懺悔發願にあり、贊儀の偈文は玄奘訳『大乘大集地蔵十輪經』に基づいて作られている。明末の智旭は十科の懺法によって『占察經行法』⁽²²⁾(日本僧敬首の『地蔵菩薩念誦儀軌』はこれと十分に似ている)を制定し、あわせて簡便で行ないやすい『贊礼地蔵懺發願』を作った。『慈悲地蔵懺儀』のなかには父母のために追福するなどの内容があり、かつ大量の中国に典拠

のある伝説を含んでいる。『地蔵慈悲救苦薦福道場儀』は民間の地蔵懺儀の重要なお手本となり、雲南の明清の阿吒力教の僧は地蔵法会を催して、常に科儀を用い、『地蔵菩薩本願經』に基づいて作られており、親族ために死者を済度し追福し、あるいは自身のために消災修福した。総合的に見ると、懺儀はまず『地蔵十輪經』に依り、ついで『地蔵三經』を同様に重んじ、後に『地蔵本願經』などの本を重んじた。敦煌遺書に多く出現した『地蔵菩薩十齋日』は、四川省大足県の宝頂山の地蔵地獄変相に刻まれており、いずれも十地獄の彫刻に配当されている。この短い經本の儀軌は、その形成発展に、三系統、八種の録文があり、また八閻齋戒と密接に関係しており、仏を信ずる俗衆は、毎月十回の齋日に、どんな種類の軌範に従い、いかなる仏・菩薩の名号を念ずれば、地獄の諸災を受けず、しかもいかなる福を獲得できるはずなのかを説いている。『地蔵菩薩本願經』は莫高窟北区の考古品のなかに出土した残巻があり、これは世にも貴重な活字印刷本の仏教經典である。また地蔵の方面の經典は、回鶻人のなかで

も広く流伝した。研究によれば、回鶻の仏典のなかには、『地蔵十王経』などの漢地で撰述された疑偽經典が十分に流行した。回鶻文で図を備えた『仏説十王経』の断簡は、日本の天理図書館、ベルリンにも多くのコレクションがある。本当に回鶻仏教の地獄の觀念と地藏菩薩に対する崇拜を反映したものである。訳本は漢僧の偽經から出ている。⁽²³⁾日本の地藏菩薩の信仰も大変盛んであり、多くの重要な寺廟のなかにはすべて地藏菩薩像と殿堂があり、さらに多くの古代から保存されている地藏菩薩、地藏十王の画像などがある。日本には民間の祈祷求福がしやすいように、さらに簡略な手法で彫刻した石の地藏の像が街頭に置かれ、子供に対する保護、安全祈願に重点を置いている。韓国の地藏菩薩の信仰も、その地藏の寺廟と地藏の画像の状況から、ほぼその一部分を見ることが出来る。中国仏教史上、新羅の僧、円光と『占察経』との密接な関係から、金喬覺、つまり金地蔵が九華山にやって来て地藏菩薩の道場を建ててから、すべて地藏信仰と中国・韓国の仏教の特にすぐれた因縁であり、朝鮮、韓国自身の地

蔵菩薩の信仰もまた歴史が長いのである。

二 古代と現代社会のなかの

観音・地藏菩薩の精神

(一)古今の社会のなかの観音、地藏の精神の調節作用
古代社会のなかの奴隷、封建王朝の時には、社会の構造は農業経済を偏重した。社会の階層、等級の違いは明確であり、特にインドのバラモン、クシャトリア、ヴァイシヤ、シュードラの四種の姓はそうであった。仏教は極力、不平等に反対し、平等を強調した。しかし、国王、僧侶、士農工商などはやはり存在する必要がある、社会に法治はあるけれども、かえって人治の基礎の上にあるとした。古代インドの転輪聖王の觀念は、仏教のなかにも十分に流行し重視され、観音と地藏の信仰のなかにも現われ、特に地藏の冥府の信仰のなかの「十王」の觀念に現われており、死後の世界の掟の觀念、地獄の審判などは法治ではないけれども、かえって最後の審判の内実がある。この種の最後の審判は、キリスト教にあり、さらには古代エジプトなど

の原始宗教にもまた存在する。当然、最後の審判は人間の善悪の行為を根拠とし、現代社会が法律の条文を根拠にするのと相違する。しかし、古代社会において地藏菩薩は人間の死後の懲戒と判決において、個人の一生の善悪を根拠としたことに反映され、これは現実の人々の道徳の制限に対しても重要な働きを起こした。

人類の社会形態の発展は、マルクス主義の古典の学説によれば、奴隷、封建、資本主義、社会主義などがあり、経済形態の変化を社会の発展の基礎とすることが、その重要な原理である。現代の社会形態には、公有制、私有制などの基本形式があり、また多種の交叉複合した要素から構成されている。しかし、現代社会は、工業化経済を基礎としており、そしてさらに科学技術を重んずるポスト工業化の段階にまで発展した。社会経済の運動の構成の原則は、商品経済の等価交換であり、社会階層の高下の原則は、分業の理解に取って代われ、法治の原則は法律を規則とする。法律は犯罪に対して規定があり、平等な競争に達することを保護しなければならず、公平で合理的な競争は商品経

済の発展の基礎を作り上げる。法律の規定の範囲のうえでは、どのように商品の生産、交換、分配を進めるかについて、やはり大きな選択の余地と人による区別があり、そのなかにはやはり不合理、不平等な部分が存在する。したがって、精神の教化と倫理道徳の働きは依然として最も重要な役割を果たしており、社会の構成と安定した発展のなかで欠くべからざるレベルなのである。精神の教化、究極的関心の面において、仏教は古い歴史を持つ伝統的な宗教として、悠久で豊富な財産が埋蔵されている。社会倫理の範囲の面では、仏教の大乘菩薩行の社会に普及するという入世（出世、出世間の反対語で、積極的に現実の世間、社会に参加すること——訳者注）の精神には、非常に高いレベルがあり、観音と地藏の慈悲と悲願の精神は、やはり代替することのできない価値と働きを持っている。

(二)古今の社会のなかの観音、

地藏信仰の相違と直面する課題

初期仏教の社会政治思想の内容は比較的少ない。仏

教の思想体系は根本的にやはり思弁性であり、人間が偉大な悟りを得ることを趣旨とし、哲学の傾向と来世の傾向が突出している。したがって、社会政治との関係は比較的少なく、社会政治に関するいくつかの教義は、三蔵に散見するが、確かに少ない。仏教の社会政治思想を受けたアショーク王の例はあるけれども、ただそれだけであって、それ以後、アショーク王と同様に仏教の社会政治思想を受け入れたものとはとても少ない。仏教の社会的意義は二つの問題に集中している。つまり、世襲の種姓制度を認めず、人々の社会的地位はその価値、行為、性格によって決定されるのであって、自らの血統と出身によって決まるのではない。ブッダは人々の生計を立てる方法には、正しいものと誤ったものとの二種があると考え、倫理に合わない職業、たとえば食肉処理業者、毒を販売する商人、武器製造の商人などを承認するのを拒絶し、根本的に禁止した。政治の面では、仏教は、政府が当然動物（一切有情）を含む人民の福利をできるだけ向上させるべきであると考えている。宗教は国民生活の基礎であるべきで、サ

は異なるところがあり、一方では工業科学技術の発展も新しい問題をもたらし、他方では古代宗教も現代社会に適応する必要がある。現代社会の発展によって、科学は繁栄し、技術は進み、生活と医療の条件は改善し、人口の増加が激化し、寿命もまた大いに延びている。同時に出現したものにも、多くの現代社会の問題がある。ポスト工業と呼ばれる社会の欠点がある。主に事故、環境汚染、種の絶滅などのいくつかの大きな面があり、人間と自然の不調和という重大な問題を生み出した。現代の条件のもとで、多くの面で、数十年間に作られた問題は、以前の数千年間、さらにそれ以上の年数の問題の蓄積を超過した。さらにたとえば天災・人災の面では、地震と火山の災害はけつして避けることができず、予報さえし難くなっている。現代社会の人口の集中、建築の高層化によって、地震が引き起こす傷害・死亡は、逆に古代に比べてさらに重大になった。人災の面は、さらに恐ろしい。たとえば工業生産のなかに持ち込まれた災禍については、採掘化学工業、原子力発電の企業にはすべて一定の割合の事故

ンガは供養を受け、道徳は励まされる。素朴かつ崇高な理想は、転輪聖王、あるいは法王身のうえに体现され、アショーク王はその模範である。たとえば現代社会からいっても、仏教のこれらの理想は十分に合理的であり、宗教の極端な主義を含まない。⁽²⁶⁾

大乘仏教の菩薩行は、古代に深く浸透して普及し、またその社会経済の形態と大いに関係がある。封建社会では、農業耕作経済を主体とし、生産力は比較的低かった。天に頼って飯を食い、自然に依存し、人々は自身の運命に対して理解し把握することができなかった。たので、しばしば種々の天災、人災の前で困惑する。人々は宗教にすがり、仏教の諸神、あるいは種々の神霊にすがり、自分が天災・人災を乗り越えることができ、安らかで心配がないように神が保護することができ、安らぎに希望する。観世音菩薩は苦を救い難を救い、人々の精神の空虚と困惑とを解決することができ、さらには社会を安定させる面において機能した。

しかし、現代の工業社会の形態のもとでは、情況に

の発生がある。交通事故は、自動車、汽車、飛行機、汽船などの種々の乗り物のなかにすべてあり、全世界で毎年これによって死亡する人間の数は、古代社会のいくつかの戦争とさえ比べることができるといえる。現代の科学技術の発展も、軍事武器の殺傷力をきわめて大きく強化した。現代の工業がもたらした環境悪化、砂漠化、大気汚染、温室効果、水資源の浪費、有毒物質の排出は、すでに人類自身の生存に対して脅威となっている。多くの貴重な動物は、経済価値によって捕殺されている。人間とともに自然のなかに存在する動物は人類の活動によって絶滅し、環境の破壊はひいてはすでに人類自身の生殖能力の下降をもたらし、クローン技術などはすでに社会に新しい倫理問題に直面するように迫っている。現代社会の経済発達をもたらした負の面の影響は、我々に大乘仏教の菩薩行について、やはり力を込めて提唱する必要があることを告げている。人類から動物などの生命に至る一切有情を重視する仏教の願心は、やはり現代社会の病弊をずばりと突いており、観音と地藏の慈悲憐憫の願は、現代社

会の種々の事件や環境のなかで、人類の心に対する慰謝、上昇、浄化であり、確かに軽視することのできない働きがある。

しかし、古代と現代社会のなかの菩薩信仰の形式は、同じであるはずがなく、また同じであるべきでもない。中国の古代の観音の霊験の物語は、ずっと流伝してきた。さまざまな人物と物語、それぞれの階層、各種のストーリーには、すべて相應する現われがある。特に六朝の段階では、君主から平民まで、すべて相應する霊験があった。観音が難を救う霊験は、けっして現代社会にまで延長することができない。現代社会の天災地変の種類と範囲も大いに増加したからである。現代の葬儀の方式の変化によって、死者を救済する地藏信仰が民俗に深く浸透した程度は、また古代とは比べることができない。

宗教が現代社会のなかで占める地位と働きは減少した。たとえば古代社会と比較すると、仏教の古代の精神生活のなかの地位は重要であり、すでに伝統文化のなかの重要な支柱となった。ところが、工業社会の発

私のコレクション、考古学の発掘と実地調査などは、

すべて古代の芸術作品と離れられない。宗教美術品はまたそのなかの重要な面を占め、各種の材質の観音、地藏の造像や刻経などは、すべて古代社会の創造性のある芸術であり、けっして芸術家によって個性が発揮されたのではなく、古代の施主と技術者の敬虔で誠実な宗教精神を反映した作品である。東洋の国家の古代宗教の美術品のなかに、観音と地藏菩薩はいずれも多くの分量を占めており、きわめて高い芸術に対する造詣を備えており、審美教育を含む現代人の素質の教育に対しても、とても大きな作用を起している。

現代社会の複雑多様な環境のなかで、新興宗教も不断に発生発展している。新興宗教のなかのいくつかのものは、伝統宗教のなかのすぐれた伝統を継承し、また現代社会に適応する努力をなした。しかしまたいくつかの悪い邪教が発生し、反社会、反人類の劣悪な本質を備えている。この面は、現代社会の環境、心理の二大領域が日増しに発展するなかで重大な問題を露呈しており、宗教の精神と関心が、なお社会のきわめて

展にともない、商品の消費文化は日に日に生活方式の主流となり、いつのまにか宗教信仰の伝統に対して圧迫し、映像文化の娯楽の方式の性質も、人々の精神の追求を消失させている。また交通の発展と情報の流通にともなう、各種の異なる宗教がたがいに伝播し、仏教は欧米の西洋国家において一定程度の発展を獲得した。しかし、キリスト教などの西洋の宗教も東洋の国家において伝播した。古代宗教の多くの面は、現代社会において文化と芸術の形態として扱われ、古代文化の遺産の一つの重要な面を體現したものとなった。たとえば古代の僧が念誦し、訳注した仏教経典は、現代の大学、研究所のなかで、重要な関心を受け、研究討論されている。その哲学、思想、歴史、信仰の内容は、整理、研究、討論されている。現代社会の古代文明、文化、社会に対する理解は、一種の知識体系の教育のなかに築き上げられている。古代の石窟と廟の建物で、貴重な文物の価値を持つものは、国家の各等級の遺産、ひいては世界の文化遺産として保護され、観光案内をされる。ところが、博物館、美術の展覧、公

大きな需要であることを物語っている。しかしまた一方では、現代社会は宗教の精神に対してもさらに高い要求を持っている。伝統宗教のなかの度を越した功利性のある、仏・菩薩に対する救済を求めている拝礼、「求め有れば必ず応じ」、先に求めて得た後にさらに願うという仕方の崇拜は、今に至るまでなお流行しているけれども、けっして真正な宗教精神を體現したものではない。したがって、我々は観音と地藏の信仰のなかの無限の慈悲、広く深い大願という真正な精神の核心を唱道し、それが現代社会のなかの多方面において機能を発揮し、人々の心と精神の境界を浄化し、向上させるようにしなければならない。

注

(1)

巴宙教授の『弥蘭王所問經』の分析によれば、原始小乗仏教のなかにも、利他の精神の要素がある。たとえば、「もし人が百年の間、その為す善を他人に廻向する場合、くり返し廻向するとき、善はさらに増加する。彼は彼の望むどのような人とも、その善を分かち受けることができる」とある。功德を廻向す

- る) (Transference of merit) は、他人を大いに利益する菩薩行である。これは巴宙の漢訳した『南伝弥蘭王所問經』(中国社会科学出版社、一九九七年一月、北京) 一二頁を見よ。
- (2) 『中華仏教百科全書』八(台北出版、一九九四年)、四七一六頁、「業・業報、業障、業感縁起」などの項目。
- (3) 敦煌写本ベリオ3510号貝葉本の第十一から第十七葉まで、表裏両面に書かれ、それぞれの面に三行、晩期のコータン語であり、梵本の『大本』の前半部分に相当する。Pros Oktor Skjaervø, *The Khotanese, Hidayasutra. A Green Leaf, Papers in Honour of Professor P. Asmussen*, 1988. ベーリーにも転写がある。Khotanese Texts III を参照。『敦煌学大辞典』(上海辞書出版社、一九九八年二月、上海) 五〇〇頁の当該項目を参照。
- (4) 敦煌写本ベリオ3513号貝葉本の第十三から第四二葉まで、表裏両面に書かれ、それぞれの面に四行ある。内容は唯識宗に属する。Lewis Lancaster, *A Study of a Khotanese Prajñāpāramitā Text, Prajñāpāramitā and Related System*, 1977. 『敦煌学大辞典』(前掲同書) 五〇〇頁の当該項目を参照。
- (5) ベリオ2925号の2。同類の文書は、さらにベリオ5537とCh(千仏洞) 0044に見える。張広達、榮新江「巴黎国立図書館所蔵敦煌于闐語写卷目録初稿」(『于闐の經典の性質と特色を確定した。』
- (11) 『北京大学蔵敦煌文獻』②(上海古籍出版社、一九九五年)、カラー写真17など。
- (12) 張惠明訳、ディヤコーノフ・N・V、ルドルフ・M・L「科洛特闊夫、ロロ收集的の千手觀音像絹画」兼談公元九一十一世紀吐魯番高昌回鶻宗教的混雜問題」(『敦煌研究』一九九四年四月)。艾伯特「伯孜克里克的千手觀音絹画」(一九八七年敦煌會論文石窟藝術編、遼寧美術出版社、一九九〇年、沈陽)。
- (13) 『敦煌学大辞典』(前掲同書) 五〇五頁。
- (14) Pelliot Sogdian 7, 刊法訳・邦旺尼斯特(E. Benveniste) 著「粟特語文獻選刊」(Codices Sogdiani) (『粟特語文獻』(Textes sogdiens) I)
- (15) Or. 8212 (英国図書館所蔵粟特語文獻) および上記の「粟特語文獻選刊」(『粟特語文獻』)
- (16) Pelliot Sogdian 14, 刊法訳・邦旺尼斯特(E. Benveniste) 著「粟特語文獻選刊」(『粟特語文獻』)。日本の吉田豊によって比定された。
- (17) Pelliot Sogdian 8, 刊法訳・邦旺尼斯特(E. Benveniste) 著「粟特語文獻選刊」(『粟特語文獻』)。英国所蔵の同経は『印度学伊朗学選刊』において刊行されている。
- (18) 上海古籍出版社とロシアの共同出版である。府憲展は「敦煌文獻辨疑録」(『敦煌研究』一九九六年第二期) 八八頁において、この文獻は西夏の黒水城の文
- 闡史叢考』、上海書店、一九九三年二月) 一七八頁。Or. 8212号、ベリオ2929号、ベリオ2782号のなかの部分である。『敦煌学大辞典』(前掲同書) 五〇一頁。前注5の張広達、榮新江の同論文、一八七頁。
- (7) 『敦煌学大辞典』(前掲同書) 胡語文獻部分。張広達、榮新江「敦煌『瑞像記』、『瑞像圖』及其反映的于闐」(『于闐史叢考』、前掲同書) 二二二—二七九頁。
- (9) 窺基の漢本から訳した回鶻文の『妙法蓮華經玄贊』は、敦煌第5窟から出た元代の写本であり、スウェーデン人種学博物館(The National Museum of Ethnography) が一葉を所蔵し、他の三十四葉は行方不明であり、日本の羽田は写真六十八枚を所蔵している。ドイツの探検隊はトルファンで発見した写本(題に沙州という字句があり、敦煌から来たものかもしれない)と、ベリオが敦煌で手に入れた五葉の残巻とは同じ本であるはずであり、元代の写本と比べると早い。『敦煌学大辞典』(前掲同書) 当該項目、四九四頁。
- (10) この経本の比定には一つの過程があった。最初、羽田亨は「俱舍論安慧実義疏」の一部分であると誤認し、一九七〇年、スナシテキン(Snash Teikin) が韻詩(本生物語)であると分析し、一九七九年、庄内恒正弘は『東洋学報』五八「ウィグル語写本・『觀音經相應』—觀音經に関する'avadana」一九八二年の專著「三篇与觀音經相應的譬喻譚」で、やっとこ
- 献であり、敦煌の文獻ではないといっている。メンシコフ「黒水城出土漢文遺書叙者録」一九九号は、「祈禱の時に読む偈と陀羅尼の文集である」と定めた。『中華仏教百科全書』(前掲同書) の「大乘莊嚴宝王經」の項参照。
- (19) 汪娟「敦煌写本『觀音礼』初探」(『吳其昱八秩華誕敦煌学特刊』、一九九九年六月、台北)
- (20) 周一良「跋觀音偈贊」(周一良・錢文忠訳『唐代密宗』、上海遠東出版社、一九九六年七月、二八—三三頁)
- (21) 汪娟「歴代地蔵懺儀析論」(『仏学研究中心学报』第四期、台湾大学仏学研究センター、一九九九年) 一七二頁。
- (22) 雲南風儀県の北湯天で、一九五六年、ひとまとまりの大理国の仏教典籍を発見した。また個人のコレクションから探査したものも多い。侯冲「雲南阿吒力教經典及其在中国仏教研究中的價值」(方広錫主編『藏外仏教文獻』第六輯、宗教文化出版社、一九九八年九月、北京) 三八九—四〇〇頁。趙文煥・侯冲整理「地蔵菩薩慈悲救苦薦福利生道場儀」(『藏外仏教文獻』第六輯、二一七—三三頁)。写本の原題は、余杭沙門釈元照集とあり、現在、清の康熙年間の題記を備えており、整理者は、余杭沙門が宋代の時の人であると考えている。玉溪県の延光居士は、旧写本「地蔵菩薩慈悲救苦薦福利生道場綱要」と「薦福利生慈悲救苦地蔵尊經密教卷上」を所蔵しており、

儀軌の部分の内容とだいたい同じであり、すでに対校本とした。一九五六年、雲南風儀の北湯天の董氏の祖廟で発見されたひとまの阿吒力教の典籍のなかに、さらに多くの重要な地蔵の典籍があった。たとえば雲南図書館に所蔵される『地藏科上』、『地藏科儀』の写本などである。参考にすることができる。

(24)

彭金章「敦煌莫高窟北区洞窟所出多種民族文字文献和回鹘文本活字綜述」(『敦煌研究』二〇〇〇年二期)

(25)

高士榮・楊富学「漢伝仏教対回鶻的影響」(『民族研究』二〇〇〇年五期) 七一―七六頁。

(26)

僧伽羅克悉多比丘撰「仏教」(A.L.巴沙姆主編『印度文化史』第八章、商務印書館、一九九七年一月)

(ちょうそう／中国社会科学院世界宗教研究所副研究員)

(訳・かんの ひろし／創価大学教授・東洋哲学研究所研究員)